



|              |                                                                                       |
|--------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 〔作品紹介〕 ルシア・ヒラツカ『サユリの本』（後篇）                                                            |
| Author(s)    | ヒラツカ, ルシア; 平田, 恵津子                                                                    |
| Citation     | ブラジル研究. 2013, 9, p. 59-97                                                             |
| Version Type | VoR                                                                                   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/106540">https://hdl.handle.net/11094/106540</a> |
| rights       |                                                                                       |
| Note         |                                                                                       |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 〔作品紹介〕

### ルシア・ヒラツカ『サユリの本』（後篇）

平田 恵津子 訳

#### はじめに

本稿は、児童文学作家で、挿絵画家でもある日系ブラジル人三世のルシア・ヒラツカがポルトガル語で書いた『サユリの本』の後半部分を訳したものである。昨年度、前半部分を翻訳、刊行した際、作家紹介と作品解説を行なったので、ここでは、後篇から読み始めても理解できるよう、前半のあらすじを簡潔に記しておきたい。

作品には、第二次世界大戦下、ブラジルのサンパウロ州内陸部で暮らす日本人移民たちの不穏な日々が、ひとりの少女の視線をとおして描かれている。語り手のサユリは、畑仕事と家事で忙しい母親がたまに読んでくれる本をひとりでも読めるようになりたくて、小学校へあがる日を楽しみにしている女の子である。しかし、ブラジルで排日論が高まるなか、日本語学校は閉鎖され、日本語の使用や集会も禁じられてしまう。大人たちは教員ボランティアを募り、物置小屋などを利用し、場所を変えながら、子供たちの日本語教育を続けていくことにする。本篇は、人目につかないよう、夜、子供たちがランブを手にして田舎道を「教室」へ向かって歩いて行くところからはじまる。

## 『サユリの本』 （後篇）<sup>1</sup>

### 歩いていく道

暗がりはいよいよのころほど暗くなくなった。草むらも、もうそんなにこわくはない。私たちをわざとこわがらせようとしているみたいだった木も、ただのおかしな影になった。枝が空に向かって広がっている。

お月さまは？お月さまがまんまるい夜にはランプを持って行かなくても平気。私は、空を見あげて、お月さまと一緒に歩いて来るのを見るのが好き。私が立ちどまるとお月さまも立ちどまる。私が歩き出すと、お月さまも。お月さまがかくれると、私たちの道はすこし暗くなる。でも、またすぐにあらわれて、木や、草むらや、前を歩く男の子たちや、まじめそうな顔をした同級生のナミをてらす。お月さまはまるで懐中電灯みたい。



お祭りの日にはたくさんの電灯が学校をかざっていた。でも、学校でやっていたお祭りも映画もおしばいも、今はもうなくなってしまった。ああ、がっかり！

いつだったか、ぶたいに影男が出て来たことがあった。学校にはたくさんの人がいて、まるで地区の人がみんな集まってきたようだった。影があらわれたとき、私にはわけがわからなかった。影の持ち主はどこ？どんな影にも持ち主がいるはずなのに、どうして？影は白い布が垂れさがっているところにあらわれて、踊ったり、歌ったり、けんかしたり…あんまりおかしくて、みんな大笑いした。私は、あんなに笑っている父さんを見たことがなかった。

---

<sup>1</sup> 原典 Lúcia Hiratsuka, *Os livros de Sayuri*, São Paulo: Edições SM, 2008.

お月さまがまんまるではない夜は、ランプのおともがないと出かけるのは無理。そんな夜には、男の子たちは、教室へ着くまでの道を、ずんずん先に歩いていく。私とナミはもうひとつのランプを持って追いかける。

「行っちゃった…」私は言った。

道を曲がると、明かりはどこにも見えなかった。

「どこへ行ったのかしら？」不思議そうにナミが言った。

走ったとしてもそんなに遠くまで行けるはずなかった。

「ウー！ウー！」男の子たちがやぶの中から叫びながら出てきた。

私たちはびっくりして、ランプを落としてしまった。男の子たちがあんまり大声で笑うので、誰かに聞かれるんじゃないかと、私はどきどきした。ばかね、近くに家なんかない。それから、私はすごく腹がたった…男の子たちはランプの火を消してしまっていて、誰もマッチを持っていなかったから、私たちは半分のお月さまの明かりだけで、暗いなかを歩かなくてはならなかった。なかなか前に進まなくて、授業におくれてしまった。もしハナエが一緒だったら、男の子たちをしかってくれたのに。

～～～

それから何日かして、何が起きたかって？授業が終わって、帰る途中のことだった。空には、とても細いお月さまが私たちについて来ていた。ときどき風が草をゆらしていた。

「おい、みんな！」まっさきに気づいたのはセイジだった。

「見えるだろう？」

遠くに小さな明かりが見えた。それも、ふたつの明かりが。

「あっちに？あっちのほうには家はなかったぞ…」兄さんが言った。

「誰か来る…」

ほんとうに、誰かが私たちのほうへ向かってやって来ていた。

「もしもお化けだったら？」シンがふざけた声で言った。

「やめてよ！」私の声はふるえていた。

ユキオ兄さんは笑ったけれど、兄さんもこわくてしかたなかったから、へんな笑い声をあげた。

「なにが見えるの？」いつもはあまりしゃべらないナミが聞いた。ナミもとても不安そうな顔をしていた。

「明かりがふたつ。見えないの？」

「私にも見えない」その日は一緒に来ていたハナエが言った。ハナエはうそなんかつかない。

私がハナエのうでにしがみつくと、冷たい風がとおっていくのを感じた。明かりは草むらのうしろにかくれるようにして消えたり、またあらわれたりした。

「ノートを捨てよう、急いで！」一番年上の男の子が草のなかにぜんぶ投げこんだ。「遊びに行ってるふりをするんだ」

「こんな時間に？どこへ？」

「かくれたほうがよくない？」

「しずかに」ハナエは、あわてずゆっくり歩きつづけるように合図した。

でも、誰も動けなかった。その場からはなれることができなかった。私の足は石みたいだった。懐中電灯の明かりではなさそうだった。小さいのと大きい。大きいランプと小さいランプかしら。それともろうそく？

「消えた…」誰が言ったのかもわからなかった。

「私には見えなかったけど、農場の人だったかもね」ハナエが言った。向こう側は真っ暗やみ。誰もなにも言わなかった。息をするのが聞こえるくらい、しんとしていた。私たちはほんのすこし待った。それは終わりのない時間のようなだった。あの明かりはどこへ行ったの？急に消えてしまった。

「ノートを拾おう」

みんな草むらのなかにほうり投げた勉強道具をさがし始めた。私はまだじっとしていた。足に力はいらなくて、手のひらには汗をかいていた。すわりこんでしまわないようにぐっと力をこめた。

「サユ、おまえのカバンだ」ユキオ兄さんがわたしてくれた。

私の胸は、みんなに聞こえそうなくらいドキドキしていた。あの明かりはなんだったの？農場の人たち？だったら、どこへ消えてしまったの？道は長くてまっすぐで、私たちのほうへ向かって来ていたはずなのに。それとも、まだかくれていて、私たちのことを見はっているの？

「行きましょう」ハナエが私の手を引き、私たちは歩きはじめた。

明かりが見えた場所をとおりすぎた。なににもなかった。背が高い草もあったけれど、そこにかくれるのはむずかしかった。

その晩、私はよく眠れなかった。ふとんにもぐりこんで、頭まですっぽりとかぶった。あの光はゆれ動いていた…あれはランプを持った人だったのよ。それから灯を消したに違いない。それとも、どこかの小屋に入ったのかしら…でも小屋はなかった。そのあと、そこをとおったんだもの…ほんとうにお化けだったら？お化けはどこにだって出てくるの？ドアや窓をしめてもしたないの？父さんはおばけなんかいないって言う。でも、父さんがほんとうのことを言っているのか、それとも、私をこわがらせないように、そう言っているのかはわからない。まるで夢の中で歌っているみたいに、おんどりの鳴く声が聞こえた。夜が明けるころ、私は深い眠りについた。

~~~~~

「サユリ、起きなさい！もう朝よ！」エミコ姉さんが私を起こした。私はなかなか目を開けられなかった。

へんね。朝になると全部が違って見えた。こわかったのが、少しだけましになった。でも、なぞは残ったままだった。あの明かりはなんだったの？かくれて勉強していることを知られてしまったの？勉強をやめなくちゃいけないの？まだ全部の字は習っていないのに。私は、ほんの少ししか書けない…私には暗やみよりも、あの明かりのほうがこわかった。

台所へ行くと、だれもいなかった。みんな、カイコ小屋か畑へ行ったのね。

私は、道の途中で見たもののことを思い出さないようにした。カップとコーヒーポットを洗って、ほかのお手伝いもやったけど、どうしても思い出すのをやめられない。どうしたらやめられるの？

母さんが戻って来たのがわかった。私はもうひとりじゃない。母さんの声に、となりのシンの母さんの声も聞こえていた。

私は母さんたちに見つからないように、窓のそばへ行った。外で母さんは、野菜のはいったかごを抱えて話をしていた。

「きのう、子供たちがふたつの明かりを見たらしいわ」シンのお母さんが言った。「あの人のたましいじゃないかしら？」

「そんなこと信じているの？農場の人じゃないの？」

「ハナエはそう言ってる。でも、セイジが明かりのひとつは大きくて、もうひとつは小さかったって。きっとそうよ。亡くなった女の人と男の子なんだわ」

「かわいそうに…」母さんは手ぬぐいで顔をふいた。「男の子はまだ赤ちゃんだったのに。ふたりのたましいのために祈りましょう。そうしたら、もう出て来なくなるかもしれない」

母さんたちが誰の話をしているのか私にはわからなかった。でも、昨日の夜の話を話していた。それから違う話になって、もうすぐいちばん暑い季節がやって来るわね、と母さんが言った。

私は台所へ行って、いすの上でひざをかかえて小さくなった。

「どうしたの？」母さんが入って来て、おかしなかつこうをしている私を見て言った。

「何でもない」

「何でもないわけがないでしょう？ああ、わかった。話を聞いていたのね」

「母さん、もしほんとうにおばけだったら？」

「たましいは何もしないのよ」母さんは火をつけながら言った。わらと細いまきがちりちりと音を立てはじめた。あの明かりもそんなふうに、すこしだけ赤かった。

どっちがもっとこわいのか私にはわからなかった。おぼけか、それとも私の本がなくなってしまうことか。それとも、もう勉強ができなくなることなのか。授業がお昼だったらいいのに…

どんなにいやだと思っても、ふたつの明かりはゆらゆらゆれていた。大きいのと、小さいのと。お母さんと男の子。私はランプの小さな明かりだけで歩いて行くのがこわくてしかたなかった。

ときどき小さな生き物がそばをとおって、私たちをびっくりさせた。たまに馬の音が聞こえてきたら、私たちはあわててかくれた。

でも、ゆらゆらゆれている明かりはどうなったの？ 私たちは、あれっきり見ることはなかった。

## さくら

一年がすぎて、新しい年がやってくる。私たちは神さまやご先祖さまにおもちをそなえる。これはかならずやること。でも前とちがって、地区のみんなが学校に集まっておもちをつくことはなくなった。そのあとで、長いテーブルについて、おしゃべりしたり笑ったりしながら、おもちを丸めることも。

~~~~~

去年から様子が変わった。みんな、自分の家でおもちを作るようになった。私は神さまとご先祖さまに、読み書きの勉強ができるようになったことのお礼を忘れずに言った。

私はひらがなをおぼえた。そして発見した。私の本の表紙に「さくら」と書かれていることを。先生に手伝ってもらわずに読めたから、よけいにうれしかった。ううん、やっぱり先生が手伝ってくれたんだ。だって、字を教えてくださいましたのは先生だもの。

私はさくらを見たことがない。父さんたちがここへ移住してきた後で生まれたから。エミコ姉さんに聞いたら、話してくれた。春になると、枝の上に花が咲いて、まるでピンクの雲のよう。すぐに散ってしまうのは残念だけど、花びらが散る様子もとてもきれい。まるでピンクの雨みたい。

あと「さくら」のよこに書いてある字が読めたらな。そうすれば、私の本に書かれているお話の名前がわかる。でも、それは漢字で書かれていて、私はまだ漢字を習いはじめていなかった。

本を開いて、1ページずつめくった。知らない線がたくさん引いてあった。どうして姉さんに聞かないの？表紙に「さくら」と一緒に書いてあるのは何で漢字なの、って？ううん、やっぱり、だめ。エミコ姉さんは、きっと私が本をどこから持って来たのか知りたがる。

それじゃあ、私がおの漢字をうんとじょうずに書き写して、先生のところへ持って行くのはどうかしら？先生はたずねるかもしれない。きみは家に本をかくしているの？私はうそをつかなくてははいけない。本のことは言えないから。やっぱり、自分で読み方を見つけよう。

母さんがいつも言っているでしょう？ひとりで読めばなにか味がするって。いつか、父さんが大きな町から持ち帰ってくれたあのお菓子みたいな味？父さんは列車で出かけた。お友達に会いに行くと言って。そして、お菓子を持って帰ってきた。

私はあんなお菓子を見たことがなかった。きれいな紙に包まれていて、細かい砂糖がかかっている、色とりどりの小さな玉で飾られていた。おそろのおそろかむと砂糖の味がした。それからやわらかい生地と詰め物。黄色いクリームがあんまりおいしくてびっくりした。あつという間になくなってしまって、ああ残念。

自分で読み方がわかったら、あのお菓子と同じ味がするかもしれない。

字をぜんぶ習ってしまうまで授業がなくなりませんように。でももし男たちがやってきて、私の本を見つけたら？ほかの本といっしょに埋めておいたほうがよかったの？父さんの言うとおりにした方がよかったの？本は1冊も

家に置いていてはいけない、って？

心配はにがいアロエの味がする。でもアロエはお菓。

~~~~

「ただいま！」台所のドアの方から父さんの声がした。私はいそいで本を  
とじて、かくさなくてはいけなかった。

「サユリ！」母さんの声だ。おこってるみたい。忘れてた！野菜とお米を  
洗って、お風呂の火をつけてなくてはいけなかった。それなのに、私はなん  
にもしないで、さくらのことばかり考えて、ぜんぶ忘れてしまっていた。

「サユリ、お昼のあいだ、何をしていたの？」

「ごめんなさい、お母さん。ずっと勉強していたの」

「家の手伝いをしないのなら、畑の手伝いをしなさい」

母さんはつかれた顔で、いそいで野菜を洗いはじめた。

「母さん、私がやる」エミコ姉さんが言った。そして私のほうを向くと言  
った。「サユリはどうしようもないなまけものね。私があなたくらいの年には、  
お昼ごはんと晩ごはんをつくって、家の掃除もしていたわ」

「末っ子はそんなもんさ」父さんはあたりまえのことを言うように言った。  
そして、自分でお風呂の準備をしに行った。

私はおこって、エミコ姉さんを見た。末っ子って本当にいや。みんなが私  
のことをまるで小さな子供みたいにあつかって、ガミガミ言う。私とたった  
三つしかちがわないユキオ兄さんまで。サユリ、それをするんだ、サユリ、  
そうじゃない、サユリ、どうしてそんなふうにやるんだ？

お日さまとお月さま

カイコがつぎつぎに生まれる。そして大きくなる。そしてまゆを作る。まゆ

は町へ運ばれて、スカーフやケープやお姫さまのドレスにかわる。お日さまとお月さまがとおりすぎていって、まゆが運ばれていって、小さな卵が産まれて、もっとたくさんのカイコが生まれる。冬が来ると、やっとひと休み。

~~~~~

本を埋めた日から1年とすこし過ぎた。男たちは来ないかもしれない、と思うようになった。どうか来ませんように。でも私たちは前と同じように授業をつづけた。週に二日、すこしずつ勉強した。読み書きのほか、足し算と引き算と、そのほかの計算も習った。

私ははじめてのノートを使ってしまった。そこで、ユキオ兄さんのノートといっしょにジャカーかごの底にかくした。だれからも、焼いてしまうよう言われなくてほっとした。どこから持って来たのか知らないけれど、父さんが新しいノートをくれた。新しいえんぴつもいっしょに。今度は、だいじに使いなさい、とは言われなかった。父さんは私が地面やわらに書いて勉強しているのを知っている。

ひらがなを習って、たくさん読めるようになっていた。先生は漢字も教えると約束してくれた。

「でもたくさんあるんだよ」先生は言った。

「いくつ？」

「ちゃんとはわからないな」

「大体いくつくらい？」私たちはたずねた。

「たぶんここから見える星の数くらいあるよ」先生は窓のほうを指さしながら言った。

そんなにたくさん？数えきれないくらい？先生は、漢字をぜんぶ知っている人はいないと言う。私たちは顔を見あわせた。大げさに言っているの？

「はい、こっちを見て！ぼくが何を持っているか、あててごらん」

私たちは、先生が手にしているダンボール箱をじっと見た。手品師みたい

に、先生は漢字がひとつ書かれた紙きれを取りだした。

「これは日、太陽のことだよ」

先生がそう言うと、まわりがぱっと明るくなったみたいだった。私たちはその字をおぼえようと、目をしっかりと開いた。そして、つぎの紙きれが手品師の箱から出てきた。

「こんどは月だよ」

まるで半分のお月さまみたいな漢字。やさしい明かり。

「書き写してごらん」

私はいっしょうけんめい、ていねいに書いた。「日」と「月」。

「これらの漢字にはほかの意味もあるんだよ。日は〈1日〉、月は〈1か月〉。太陽は1日に、そして月は1か月に関係があるんだ」先生は言った。

年上の生徒たちは、そんなのあたりまえだよ、という顔で私たちを見た。

私は漢字が読める！

父さんは本を掘り出してくれてもいいのに。男たちはやって来ない。そうでしょう？でも私はわかっていて。戦争がまだ終わっていないことを。もし終わっていたら、私たちは夜、勉強しなくてもいいはずだもの。もし本のことを聞いてみたら？父さんはきっこう答える。先のことはわからない。兵たいは、いつやって来るかわからない。あちこちで家に入って調べてるそうだ。つかまった人もいる。本当なの？

「日」と「月」。「月」と「日」。小枝を使って、裏庭の地面に書いていく。めんどりたちは、えさをねだるような顔で見ている。きりがない。いつも、もつとえさをちょうだいという顔をしている。

そして私が書いた字の上を歩いていく。私が書いたお日さまにもお月さまにもおかまいなし。おもしろいな。たくさんのお日さまとお月さま。たくさんめんどりの足あと。

ハナエは家にいるかな？漢字を習ったことをハナエに話したくてたまらなくなった。ハナエはときどき私たちといっしょに学校へ行くけれど、たまにしか行かない。家でやらなくてはいけないことがたくさんあるから。

私は日と月を書いたまま裏庭の地面をほったらかしにして、走ってハナエの家に行った。ハナエは洗濯ひもに服をほしているところだった。お日さまが気持ちよさそうに色とりどりの服やハナエの笑顔を見てらしていた。

「サユリ、勉強はどう？」

「私たち、漢字をふたつ習ったの」

「本当？どんな漢字？」

「お日さまとお月さま」

「よかったわね」

広げたばかりのシーツのところに、風が遊びにきて、白い色を軽くゆらした。それから、ハナエは男の子たちのパンツをつるした。そのとき、私たちは居間のドアを強くたたく音を聞いた。

「誰かしら？」ハナエはおどろいたようにふりかえって、たらいを地面におろした。

「変ね。近所の人だったらいつも手をたたくんだけど。あんな風にドアをたたいたりしない」

ハナエが家にもどったから、私もついて行った。居間の窓はあいていた。そして、男の人がひとり、頭を入れてのぞきこんでいた。ううん、いたのはふたり。同じような服を着ているけれど、ひとりは背が高く、やせていて若い。もうひとりはもっと年をとって、すこし太っている。私はこわいのをがまんして、ハナエにくっついてた。

年上の男が何か質問した。えっ？私には何を言っているのかわからなかった。ハナエがあわてて頭をさげたけれど、わかったのかしら。この人たちは父さんが話していた男たちなの？家を調べに来たの？

ふたりの男はなかに入って、部屋を見まわした。ハナエは肩をすぼめたまま、だまって後につづく。男たちはかごや木箱を調べてから、寝室のほうへ行った。ハナエはいそいで私を見た。不安そうだった。私はどうすればいいのかわからなくて、ハナエのうでをぎゅつとにぎりしめた。

男のひとりが台所へ行き、もうひとりは一つ目の寝室から二つ目の寝室へ

入っていった。ハナエの部屋だ。私たちはドアのところから見ていた。男は洋服が入っている木箱をあけると、手を入れて、奥のほうをガサゴソ探した。そして洋服のあいだにあった布の包みを取り出した。そして開けた。もうひとりの男を呼ぶと、ふたりでこそこそ話をしていた。包みのなかには、何通かの手紙と写真が何枚か、入っていた。年上の男がこわい顔をして包みをつかんで、部屋の外へ出た。そのあいだ、年下の男はマットレスを持ちあげた。私のおなかはしくしく痛んでいた。

ハナエは言った。

「<sup>お</sup>「<sup>願</sup>「<sup>い</sup>「<sup>し</sup>「<sup>ま</sup>「<sup>す</sup>ボル・ファヴォール」それはハナエが話せるたったひとつの言葉だった。

男たちは台所のかまどに手紙を投げ込むと、火をつけた。

ハナエは何度も言った。「ボル・ファヴォール」するとわかい男が写真を一枚ずつながめはじめた。ハナエは何も言わず、黙ったまま頭を下げた。ただの家族写真だとわかったみたいで、返してくれた。手紙は灰になった。年上の男は裏庭をさっと見てから、もうひとりの男を呼んだ。検査は終わったようだった。

ハナエが玄関口のドアをボタンとしめると、私は走って家へ帰った。今度は私たちの家？本が見つからないようにしなくちゃ。どうしよう？どこにかくしたらいい？男たちが部屋に入ってきて、マットレスを持ちあげて、私の本を見つけ出すところを思いうかべた。それから、ハナエの手紙にしたように焼いてしまうところを。

どこに？私は自分の部屋へ行き、マットレスカバーのなかから本を取り出すと、ジャカーかごのなかにかくすために部屋から持ち出した。そのほうが、あの男たちには見つかりにくい。そうよね？地面にうめるのは間に合わない。私は裏庭の地面いっぱい字を書いたことを思い出した。走って消しに行った。でもめんどりたちがその上を行ったり来たりして、私のお日さまとお月さまは別のものになっていた。ほうきではいたら、何も残らなかった。お日さまも、お月さまも。

それから、神さまにおいのりをした。

あの男たちがやって来て、ドアをたたくのじっと待った。それから、どうしよう？ドアを開ける？いないふりをする？でも、男たちはあらわれなかった。ほかの家へ行ったの？がまんできなくなって、私は居間の窓からこっそり外をのぞいた。サユリ、ブルブルしないで。もしかすると、父さんたちと話をしに農場へ行ったのかな？もし、本がうめられているって、うたがわれたら？もし、みんなつかまったら？そして、私だけここに残されたら？どうしよう？

みんなを連れて行ってしまったんだ、と思ったとき、男たちが遠くを馬に乗って帰って行くところが見えた。そして母さんが戻って来た。私は走って行って、母さんにしがみついた。

「どうしたの、サユリ？」

「母さん、男の人がふたり来たの。私たちをつかまえるのかと思った」

「落ちついて。もう行ってしまったわ」

本当だった。うちへは近よりもしなかった。だれもつかまらないの？もっと泣きたくなった。

「サユリ、このトマトを持って行ってちょうだい。すぐにみんながお昼ごはんを食べにもどって来るから」

私が涙をかくそうとしているのに気づいたかどうかわからないけど、母さんは何も言わなかった。

うちの誰かに見つからないうちに、私はジャカーかごに入れておいた本を取りに行って、また自分の部屋の同じ場所にかくした。この辺りの家をぜんぶ調べようと、男たちがもどって来たりしませんように。

私たちがかくれて勉強していないか、うたがっているの？私たちは、しばらく勉強道具は何も持たずに授業へ行くことにした。えんぴつも、ノートも、紙も。そして歩いているときには、きよろきよと辺りを見まわした。誰かがあらわれて、私たちに「こんな時間にどこへ行ってるんだ？」と聞いたりしないか、心配。

## さくら貝

「カイだ！」私はうれしくなって、つい大きな声を出した。

「さくら」の字といっしょに表紙に書いてある漢字。「貝」と「さくら」。

「さくら貝」っていうの？私の本の名前は。母さんみたいに早く読めないけれど、私は読んでいます。もう漢字をいくつも知っている。日、月、日、月、木、林、森、山、草、水、火…そして貝。



エミコ姉さんの本のなかで貝を見たことがあった。姉さんは閉じているのと、開いていて、ふたつにわかれているのを見せてくれた。あれがさくら貝だったのかどうかわからない。さくらの花と関係があるのかしら？

だれかに話したくて仕方なくなった。いっしょに勉強しているナミがあんなにおとなしくなかったらいいのに。私たちはあんまりおしゃべりしない。友だちになれば、ナミに話せるんだけど。

ほかにだれがいる？姉さんに話すと、きっと本をかくすなんてだめだって言うに決まってる。姉さんは私がすること全部にだめだって言う。もしかして埋めるように言うかもしれない。そんなのいや。

じゃあ、ユキオ兄さんは？ぜったいに、いや！兄さんはいつだってこう。父さんたちが手伝いを言いつけないときには、シンとセイジといっしょにたこあげをしたり、小川で泳いだり。私を連れて行って欲しくない。いつだったか、兄さんたちは魚つりに行った。空きかんと棒きれを持っていたから、私にはわかった。後をついて行った。小川の近くで、私がついて来ているのを知って、三人とも森へ走って行き、かくれてしまった。

森はへんな物音がしていて、近くになにかいるみたい。カビバラか、さるかも。だったらいい。でも、もしジャガーだったら？父さんは、森にはジャガーがいるかもしれないから、近づかないようにってユキオ兄さんに言った。

私はこわくなって、走って戻った。それから、男の子たちが私を連れて行ってくれないことにはらが立った。どうして連れて行ってくれないの？じやまなんかしなののに。足を水につけて、泳いでいる魚を見てるだけなのに。

兄さんに話そうかしら？ううん、ぜったいに話さない。

~~~~~

さくら貝はすこしずつ開いていく。そして、私に川や、水や、山の木や、動物たちを見せてくれる。毎日すこしずつかくれた味を教えてくれる。ひとりで本を読む味を。

~~~~~

窓のそとを見ると、空が燃えている炭のように赤く染まりはじめていた。本をとじる時間。夜には授業がある。米と大根を洗うのをわすれたら、母さんがおこる。今日は大根の煮物。ぜんぜん味がしない。

私は大きなカップを使って、ブリキ缶のなかの水をたらいへ移した。それで、ハナエに話すのはどうかしら？水のなかに大根を入れた。ハナエは私にとってもやさしいんだもの！どろが落ちて、水が茶色くなって、大根はもっと白くなった。暗い土のしたで育つのに、こんなに白い。たわしを手にして、大根を洗いながら、思い出した。

ハナエは私が小さいときから、よくめんどろを見てくれた。いつだったか、私はカイコがほしくなって、カイコ小屋から一びき持って来たことがある。毎日、クワの葉を取りに行った。白い虫は大きくなっていった。でも父さんが町からおもちゃを買って来てくれた。おなべとフライパンと色とりどりのおさら。あの日までは葉っぱがえさだった。木の皮が雨あがりの水たまりの船だった。花や葉っぱがえさになっていた。

私は新しいおもちゃが気に入って、カイコにえさをあげるのをわすれてし

まった。カイコは死んでしまった。うちのみんなは、ほかのカイコへのえさやりで忙しかった。私が裏庭で泣いていると、ハナエがやって来た。サユリ、どうしたの？カイコが死んでしまったの？ハナエはカイコをうめるのを手伝ってくれた。私たちは花をそなえて、クワの苗木も植えた。

決めた。どうしてもっと早く思いつかなかったの？ハナエに話そう。サユリ、よく勉強したわね。本を読んでいるのね。ハナエは、私をほめてくれる。いつ話そう？ときどきハナエはいつしよに授業へ行行って、私たちの宿題を見たりして、先生のお手伝いをしていた。そんなときに、ハナエと話すのはむずかしい。いつもだれかがそばにいるから。お昼のほうがいいかしら？裏庭のかたづけをしているとき？それとも野菜畑でレタスをとっているとき？

私は、たらいの横の台にきれいに洗った大根をのせた。するとエミコ姉さんが夕食をつくるためにやって来るのが見えた。

「いそいで、サユリ！さっさと大きななべをちょうだい！」

ゆっくりの時間は終わり。エミコ姉さんはいつだって、なんだって、大急ぎでやろうとする。

「授業におくれるわよ」姉さんは大根を大きな輪のかたちに切りはじめた。姉さんがすこしくらいハナエに似ていればいいのに。

授業へ行くために、うちを出ると、ハナエがほかの子供たちといつしよにいるのが見えた。私はうれしくなった。でも、ハナエは考えごとをしながら、だまって歩いた。ランプの弱いひかりがハナエの顔を照らして、私はハナエがにっこりしているのがわかった。私にじゃなくて、自分に。

「ハナエ、うれしいの？なにかあったの？」だまっていられなくて聞いた。

「私？なにもないわ、なにも」

ハナエはなにかかくしていた。なにかいいこと。私には話してくれないの？授業のあいだもハナエはにこにこしていて、私はわけがわからなかった。ハナエはときどき先生のほうを見ていた。先生はいつもより楽しそうだった。授業が終わって私たちがノートをしまっているときだった。その家のおじさんが私たちを呼んで言った。

「まだ帰らないで。知らせがあるから。いい知らせと、悲しい知らせ」  
私たちは顔を見あわせた。知らせ？

「悲しい知らせは、来年、シマダ先生がみんなに教えられなくなったこと」  
私たちはなんのことかわからず、だまって、おじさんの言葉を待った。

「そして、いい知らせは、ハナエちゃんが結婚することだ」

結婚？ハナエはとなりからいなくなるの？ハナエは先生と結婚して、先生はもう私たちに教えてくれなくなるの？私は喜ばなくちゃいけないの？だって、結婚はお祝いすることだから。

「さあ、みんなで先生にお礼を言って、ふたりにお祝いを言おう」

おまけに、先生とハナエが遠くの、べつの町でくらすことを知った。

おじさんはガラナ<sup>2</sup>のびんを何本か開けて、カップにつぎ分けてくれた。私はガラナが大好きで、お正月に飲むのを楽しみにしているけど、そのときには、ちっともおいしいと思わなかった。にがい味がした。

ハナエは、新しい年がやって来るとすぐに引っ越していった。結婚式もしないで。父さんは結婚式をしていられるようなときじゃないから、家族だけでお祝いをするんだ、と言った。今はなんだってそう。おまつりはどこもやらない。私はハナエの花嫁すがたが見たかった。結婚式にも出たかった。

地区でやっていた結婚式を思い出した。三日くらいまえからごちそうを準備して、みんなが手伝っていた。裏庭のれんがのかまど、空高くのぼっていくけむり、話し声や笑い声。そばで私たちは遊んでいた。おなべに気をつけなさい、もっとはなれたところで遊びなさい。母さんたちがさけんでいた。

ある日、お別れを言うためにハナエがうちへやって来た。私があんまりおとなしくしているから、ハナエはふしぎに思っ、私のそばへ来て、聞いた。

「どうしたの、サユリ？」

私はテーブルのあしをずっと見ていた。

「悲しまないで。いつか私のところへ遊びにきてね」

---

<sup>2</sup> ブラジルでよく飲まれているガラナの実を利用した炭酸飲料。

いつかって？いつ？私はそれがずっと先のことだとわかっていた。父さんたちが、旅行はできないって、話しているのを聞いたから。旅行をするには許可がいるって。だれの？もちろん、家を調べにきたり、学校を閉めたりしたあの男の人たちの。もしそうだったら、すぐに私はハナエのところへ遊びに行けなくなる。

ハナエが父さんたちにあいさつをして、となりに帰っていくのが見えた。もう二度とハナエに会えないかもしれない。言えばよかった…うんとしあわせになってほしいって。でもなにも言えないまま、ハナエは行ってしまった。

どっちがもっと悲しい？ハナエと先生が行ってしまったこと？それとも、また勉強できなくなったこと？ほかに教えてくれる人を探しているって聞いた。待っているしかない。また。

ユキオ兄さんは、夜、勉強したり、ランプを持って道を歩いたりしなくてもよくなったからうれしそう。でも兄さんはちゃんと読める。私はまだ。たくさん字が私のじゃまをする。私は私のやり方で読んでいく、ゆっくりと。

ほかに私たちに熱心に教えてくれようとする人が何人か見つかった。でも、みんな仕事がたくさんあったから、何ヶ月かするとやめなくてはならなくなった。そうして暑い日が何日もすぎていった。最後の先生は、柿の実がなるすこし前にやめてしまい、それから、だれも来なかった。おとなたちは、ふたつのグループをいっしょにすることを思いついたけれど、はなれすぎているし、めだちすぎると言う人もいた。こうして話し合っているうちに、柿の実はなくなくなって、枝ははだかになってしまった。寒い季節がやってきた。

## べつの世界？

寒い日がやって来て、しばらくいたら、去っていく。毎日、すこしずつあたたかくなっている。グアバの木のぶらんこで遊ぶには最高。いろんなことを考えながら、あっちへ行ったり、こっちへ来たり。ハナエのこと、なくなっ

た授業のこと。いつまでお休みなの？

～～～

そんなことを考えながら、ぶらんこをキイキイ鳴らしていたら、シンがなにか話したさそうなようです。囲いのそばに立っているのに気づいた。でもなにも言わない。変ね。シンはなにをしに来たの？そばへやってきて、なにも言わずにぐずぐずしていた。いつもは、なんでもすぐに話すのに。

「どうしたの？」私は聞いた。

「授業のことをずっと考えてたんだ」

「教えてくれる人が見つかったの？」

「まだだよ。でも、ぼくたちがサン・ペドロ農場の学校まで行けば？」

「あっちで勉強するの？」

「どんなようすか見てみるんだよ」

「私の父さんはすごく遠いって言ってた」

「道はわかるよ。こっそり行ってみようよ。みんな忙しいから、わかりやしないさ」

「そうかな。でも、そのあとは？」

「あっちで勉強させてくれって、たのむのさ」

「ゆるしてくれるかしら？」

私はすぐ行ってみたくなった。あの学校がどんなようすか知りたかった。だから聞いた。

「いつ？」

「明日。お昼ごはんを食べてから。ぼくんちに来るふりをしておいでよ」

「シンの兄さんは？」

「父さんの手伝いで、いそがしいよ」

「ユキオ兄さんも。それに、勉強のことはどうでもいいって思ってる」

「ナミは行きたいって言うよ」

私たちは、お昼ごはんのあと、マンゴの木のそばで待ち合わせした。

その日、私はずっと、農場へ行くことばかり考えてすごした。うまくいくかな？もし学校を気に入ったら、ポルトガル語を勉強したいって頼んでみよう。シンとナミがいっしょだったら、父さんたちはたぶん許してくれる。

私はお昼ごはんを食べ終わるとすぐ、おとなりへ行ってくると言った。母さんが首をかしげた。

「なにをしに？ハナエはもういないのよ」

「私がわからない漢字をシンが教えてくれるって」

「ほんとう？シンが好きなのは、遊んだり、つりに行ったりすることだけだと思ってたけど」エミコ姉さんが言った。

「だめ？」

「いいわよ。でもおそくならないようにね」

「母さん、ぼくも行きたい」ユキオ兄さんが言った。私は兄さんが私たちの計画をだめにするんじゃないかと心配になった。

「お父さんがクワ畑の草とりの手伝いをしてほしいって。サユリは、出かけるまえに台所を片づけて行ってね」

私は大いそぎでお皿となべを洗ってから、待ち合わせしていたマンゴの木のところへ走って行った。

ナミはあいかわらずおとなしくて、いっしょに行くのを喜んでいるのかどうかわからなかった。でも、よく考えてみれば、父さんたちにお問い合わせするときや、農場の学校で勉強できるようになったときには、三人いたほうがいい。

すこし歩くと道路に出た。

「もし誰かに見られたら？」私は聞いた。

「かくれるんだ」シンが言った。

しばらく歩いていたら、馬の音がしたので、私たちはユーカリの木のほうへ行って、並木のうしろを歩いた。そのつぎにサトウキビ畑が広がる場所に出た。それから、やっとコーヒー農場に着いた。コーヒーの木は花が咲いていて、枝には白い実がついていた。

歩いているうちに、あせが出てきた。農場では、グループでまとまって働いていたから、かくれるのはかんたんだった。声が聞こえたら、反対のほうへ行けばいいだけ。でも農場は広くて、だれかに会うこともなかった。

「まだなの？」たくさん歩いたあとで、私はたずねた。

「もうサン・ペドロ農場のそばまで来てるよ。学校はもうちょっと先だ」  
やっとコーヒー農場をとおりすぎて、道路へ出た。

私はこわくなってきた。なぜだかわからないけど、変な感じだった。どんな子どもたちが勉強しているんだろう？学校は閉まってないのかしら？

「あそこだ」シンが立ちどまって、指さした。

学校は高いところにあった。私たちの地区の学校より、ずっと大きくてきれいだった。窓のところだけ青くて、あとはぜんぶ白くぬられていた。学校のまえにはしばふがしかれていた。どうするの？もっと近くまで行くの？入っていくには、門をとおらなくてはいけなかった。

「もしだれかが出てきたら、どうするの？」小さな声でナミが聞いた。

そこで私は思い出した。

「シンはポルトガル語が話せるの？」

シンはだまった。ほらね、なにも考えてなかったんだわ。ナミは門のところでたくさんの花を咲かせて、私たちを迎えてくれているようなサクラソウのうしろにかくれていた。私もかくれたい気持ちだった。

「シンがいちばん年上なんだから。それにシンが言い出したことでしょう。先に行つてよ」

窓は開いていた。でも私たちはだれも門をくぐる勇気がなくて、ただじっと待っていた。

鐘が鳴った。すぐに子供たちが出てきて、おやつを食べたり、ボールのあとを追いかけてりしだした。私たちとはとてももちがっている。くるくる巻き毛は、はちみつ色や栗色で、はだの色も黒や、白や、茶色…私たちと同じように黒くてまっすぐの髪で、すごく日に焼けた女の子がいた。遠くからだったから、その子の目が小さいかどうかはわからなかった。

私は走ってにげたくなった。でも、たくさん歩いてやって来たのに、このままで帰るの？

子どもたちのひとりが私たちを見て、立ちどまると、私たちのことを指しながら、そばにいた友だちに知らせた。べつの子も気づいて、話をしながら、入り口のほうへやって来た。なにを話しているかさっぱりわからなかった。女の人が窓のところにあらわれた。きっと先生だわ。明るい色のはだをしていて、栗色の髪の毛をうしろできれいにまとめていた。みんなが私たちのことを見ていた。

ナミがぱっと走りだした。どうしよう？追いかける？私はシンを見た。こわくてしかたなかった。

「帰ろうか？」私は言った。

先生が出てきて、私たちのほうへ向かってやってきた。遠くから私たちに話しかけていた。なんて言ってるの？なにもわからない。私は父さんたちが話していたことを思い出した。もし、ほかの子たちがあの子を敵としてあつかったら？ただの子どもよ。戦争のことなんかにもわからないでしょう？だが、おとなたちが話すだろう…

私はナミのあとを追いかけて、シンもついて来た。私たちは道のまんなかで立ちどまって息をついた。うしろをふりかえると、子どもたちはしばふにちらばっていた。先生はなかに入っただけで、見えなかった。もうすこし走るとコーヒー農場に着いた。そこから私たちは歩いた。しばらくなにも言わずに歩きつづけた。あまりよく見なかったけど、べつの世界みたいで、入っていくのはこわかった。先生はなんて言っていたのかしら？先生が話していることがわからなかったら、どうやってあそこで勉強できるの？

「もし、あの先生がだれかに話したら？私たちがこっそり見に行ったら？」私は聞いた。

「なんてことないだろう？ぼくらはただ見ていただけさ」シンが言った。

「わからない」

そのとおり、ただ見ていただけだった。私はなにをしてよくて、なにをし

てはいけないのか、よくわからなかった。のどがすごくかわいて、うちに帰りたくなった。おけをかかえて、水をぜんぶ飲むの。

とちゅうでオレンジを見つけた。すっぱくて、のどのかわきはなくならなかったけれど、三人とものどをぬらすことができた。

「もっといそごう」ナミがいそぎ足になって言った。

あまり時間がかかって、暗くなりはじめたら、うちの人たちがおかしいと思うかもしれない。くたくたで、おなかぺこぺこで、おまけに、ほこりだらけでうちに帰ったら、エミコ姉さんが言った。

「勉強しに行ったんじゃないの？どこへ行ってたの？」

「ちゃんと勉強したわ。それから、川の近くですこし遊んだの」

「気をつけなさい、サユリ。川はあぶないから」

「わかってる」

「おふろの火をたいてちょうだい。まにあわないわよ」

「わかってる、今、行くところ」

私はまきの近くにこしをおろすと、ほそい枝を入れた。ここで、まきの上にもたれて、眠ってしまいたいくらいくたくた。でも、火をたかなくては。すぐに畑から父さんたちが帰ってきて、おふろに入ってゆっくりしたがるから。いつかあの学校で勉強できるようになるかな？どうすれば先生の言うことがわかるようになるのかな？ほかの子たちは？

その晩、私は早くベッドに入った。まくらに頭をつけると、すぐに眠りにおちた。

## ふたつの願い

いつもふたつでひとつの願いごとがあって、それはぴったりくっついてるけど、仲間じゃない。大好きなおかしを食べることと、がまんすること。もし食べれば、おかしはなくなってしまう。じゃあ、食べないで、見てるだけ？無理。本を読んでしまうことと、いつまでも読んでいること。さくら貝のな

かになにが入っているか、私はずっと考えている。それをぜんぶ開けてしまわないこと。もし読み終わったら、つぎになにを読もう？すると、ふたつの願いごとがけんかを始める。

～～～

父さんに聞こうと思っていた。アボガドの木のしたに埋めた本はほりおこさないの？男たちは、私たちの家を調べに来なかった…あの日、ここまでやって来たけど、それから二度と現われなかった。たぶんもう来ない。

でも父さんは、それはちがう、兵士たちはずっと、あちこちで家を調べていると言った。集まって話をしていただけて、つかまった人もいる。父さんが町へ行っても、前のように友だちと話をすることもできない。あっちではもっと注意が必要だ。たくさん人がいて、警察がいるから。

母さんは、このあたりは大きな通りからずいぶんはなれているから、私たちは安心していられる、男たちが戻って来ることもないだろう、と言う。気をぬいてはいけない、と父さんが答える。私は、あの男たちが戻って来ませんように、と思う。

もうすこしで本を読み終える。そのあとは？私は、読み終わらないように、はじめに戻ってもう一度ぜんぶ読みかえしはじめた。物語の終わりには、もっとあまい味がかくれていると思う。それとも、もっとにがい味？それとも、なみだの味？貝をぜんぶ開いてしまいたいような、そうしたくないような気もちがした。なぜなら、開いてしまったら、どんな味がするか、もう想像できなくなる。もし開かなければ、どんな味かずっとわからない。

最後のページまで、あとどのくらい残っているのか、私はじっと見た。

「サユリ！いるかい？」

それはシンの声で、台所のほうから聞こえてきた。なんの用なのか、しぶしぶ見にいった。

「先生が見つかったよ！」シンは窓の外から言った。

「ほんとう？」いろいろ知りたくて、私は裏庭へ出た。「それで、だれなの？」

「ナミのお父さんが知らせに来たんだ。おじさんの知り合いで、ほかの地区に住んでるけど、ぼくたちに教えるためにここまで来てくれるんだって。むかし、先生だったみたい」

「先生？ほんものの？」

「そうさ。ほんものの学校で教えていたって」

「いつから始めるの？」

「あした。最初の月はナミの家でやるってさ」

あした。やっと勉強がはじまる。私はアボガドの木のうえのほうを見た。カマドドリの巣。どうやってあんな巣を作るのかしら？私はあの色が好き。

それから授業がはじまった。まえとおなじで週に2回。夜、ランプを手に持って歩くのはいやだと思ふときがあるのはわかっているけれど、道の途中でこわい思いをしたことまで、なつかしかった。

ナミの家はこれまで授業をしたどの場所よりも、ずっと近くにある。私たちは途中で、一緒になりながら、勉強場所へ向かうことになった。

新しい先生は、これまでより年上の男の人だ。やせていて、髪はほとんど白くなっている。私ははじめ、すこしこわそうだと思って、にっこりとしなかった。すぐに先生はまじめなだけで、きびしいわけではないとわかった。先生はブラジルへ来て、コーヒー農園で働くようになるまで、長いあいだ、学校の先生をしていたと話してくれた。

先生は、まるで畑仕事をしに行くみたいに、くたびれた服を着て、大きな麦わら帽子をかぶり、馬に乗って、となりの地区からやって来る。そして、到着すると服を着がえる。授業をするために、古いけれどきちんとしたスーツを着る。するとほんとうに先生らしくなる。ううん、服のせいだけではなくて、先生はたくさんのことを知っている。教えることができて、とてもほこらしげにしているのがわかる。

最初の授業で、先生は私たちに集まるよう言った。それから小さな黒板にチョークで円を書いて、私たちに見せながら、説明した。それは地球で、私

たちが住んでいるところ。

「世界は大きいの？」ほかの生徒が聞いた。

私はおじいちゃんたちが住んでいるところをいっしょうけんめいに見つけようとした。母さんのお父さんとお母さんはもう死んでしまったけど。

「大きいかって？世界は無限だ。でも小さな世界もある。たとえばまゆを思いうかべてごらん。あれもひとつの世界だ」

それから、先生は町の話をして、それはまた別の世界だと言った。そこには家がとなり合ってくっついていて、お店や倉庫や、電車の駅があり…」

「先生は電車で旅行したことあるの？」男の子が聞いた。

「何回もね。むかしはよく旅したものだ。いろんな場所へ行ったよ…」

「電車ははやいの？乗合バスより？」みんな、つぎつぎに質問した。

父さんはいつも私たちが住んでいるのは世界が終わるところだ、と言っている。じゃあ、はじまりは？私は先生がかいた絵を見た。もし世界がまるいのなら、世界が終わるところは、はじまるところじゃないの？

乗合バスに乗ったり、町をまわったり、電車に乗ったり。私はちがう世界を知りたくてしかたなくなった。農場の学校で勉強したり、町の、ちがう場所で暮らしたり。そこには、きっとたくさんの学校や、私がまだ知らないいろんなことがある…でも、いつもおなじ場所に住んでいたと思うときもある。私が知っているもの全部、グアバの木や、ぶらんこや、めんどりや、カマドドリのそばで暮らしていたって。まえにも言ったでしょう？いつだってそう。ふたつの願いは反対のことなのに、どうしていつもいっしょなの？

## わらのあいだで

ごはんはこげている。フェイジャン<sup>3</sup>はかたくて、しょっぱくて、へんな味が

---

<sup>3</sup> 豆のシチューで、ブラジルの家庭料理。

する。私はなにをまちがえたの？塩の入れすぎ。なにが足りないの？私がはじめて作ったお昼ごはんはじょうずにできなかった。ユキオ兄さんはしかめっつらをしている。父さんはなんにも言わずに、もぐもぐ食べている。母さんはちょっと笑って、すぐにうまくなるわ、と言う。エミコ姉さんはじっと考えこんでいる。きっと、私がどんなまちがいをしたって言おうか、考えてるんだわ。

~~~~

これで私の仕事はふえた。毎日、お昼ごはんを作らなくてはいけない。

去年まで、料理をしたことはなかった。ただ、卵を焼いたり、米を洗ったり、野菜の皮をむいたり、切ったりしていただけ。姉さんが説明する。サユリ、ごはんがこげないように、火をすこし弱くするのよ、フェイジャンをおいしくするには、にんにくを忘れないこと、塩の入れすぎには気をつけて。すこしずつ入れていくのがいちばんよ。

私がなべの底にこげついたごはんをごしごしと力いっぱいこすり落として、お昼ごはんのお皿洗いを終わろうとしているときだった。

「サユリ、終わったかい？」父さんが台所のドアのところへ来て言った。

「今日、おまえとユキオはおとなりを手伝いなさい」

「なにをするの？」

「物置小屋のかたづけだ。シンの父さんが授業にうってつけだと思いついたんだ。ユキオはもうあっちへ行っちゃったよ」そう言って、出て行った。

私はたらいのよごれた水を捨て、洗ったものをしまい、テーブルをぬれふきんでふいてから、おとなりへ走って行った。ユキオ兄さんとシンは、物置になっていた古い小屋にあるものを動かしていた。とうもろこしの皮がつまったふくろ、バケツにするための空っぽの灯油かん、くわ、シャベル、麻ぶくろ、そしていちばん下にあったのは、竹であんだ箱。うちにあるのより小さくて、ぼろぼろだった。

「ぜんぶ、小屋のすみっこにかたづけるんだ。そしたら、ぼくの父さんがテーブルを作って、小さな木箱を集めてくれる」シンが言った。

こんなに近くで授業があるなんてすごい。私たちは、右側にものを積んで、反対側を使えるようにしようと決めた。ほこりがひどくて、私たちは何度もくしゃみをした。

「こっちを手伝って」シンが箱を動かそうとしていた。

私とユキオ兄さんは反対側をもった。

「重たい！なにが入ってるの？」私は聞いた。

「サユ、ちゃんと持てよ」

おそかった。あまりに重たくて、私は手をすべらせてしまい、箱はかたほうにかたむいて、ゆかに落ちた。

「ほら！」シンが大声で言った。

私とユキオ兄さんはあわててしゃがみこんだ。麻ぶくろに包まれている…  
たくさん本！

「シンのお父さんの？」私はゆかに散らばった本を見わたしながら聞いた。

「姉さんのだよ。ここにかくしてたのか？知らなかった」

「ハナエの？」

「そうさ。姉さんは本を読むのが好きだったんだ。そう言えば、いつだったか、本が家からなくなってしまっていた。およめに行くとき、姉さんは持って行けなかったのに」

「どうするの？」本を1冊ずつひろいながら、私は聞いた。

「箱に入れて、もとのとおりにしておいたほうがいい」

「1冊だけ、持って帰ってはだめ？」

「もし男たちが来たら？それに、ハナエに聞いてみなくちゃ。ハナエのなんだから」兄さんが私を手伝って、本を箱のなかに入れてくれた。

ハナエは遠くにいる。どうやって聞くの？絵がついている本、ついていない本、そこにはきっとたくさんのお話が入っている。何冊かうちへ持って帰りたくてしかたなかった。

「ぜったい見つからないようにかくそう」

ふたりは箱の横を押しながら動かして、かべにぴったりとつけた。それから、その上にほかのものをのせた。

私は母さんが読んでくれた、かくされた宝物のお話を思い出した。ほんものは、見たことがなかった。なぜ、父さんも私たちの本をこんなふうにかくさなかったの？ そうしたら、私はときどき読めたのに。でも、私が聞いたら、父さんはこう言うに決まっている。もし男たちに見つかったら、ろうやに入れられるかもしれない。ハナエはあぶないとわかっていてやったのね。あの日、ハナエがこわがっていたいちばんの理由はこれだったのね？ 男たちが小屋を調べることでしょう？ なのにひっこしたとき、ハナエは本をぜんぜん持って行けなかった。

私たちがどんどんかたづけていくと、広い場所ができた。父さんとタナカさんはカイコが眠るころを見はからって、木の幹をあつめ、大きなテーブルを作った。教室に見えてはよくないわ、とシンのお母さんが言った。だから、いすの代わりに使う木箱はほかの畑仕事の道具といっしょにテーブルにつみあげることになった。

そのすぐつぎの週に、そこではじめての授業が開かれた。

先生は私たちに、もっとじょうずに書けるようにならなくてははいけないと言った。きれいな字、じょうずな作文、手紙も書けるようにならなくては、と。だれに手紙を書くの？ ハナエに？ ハナエがうちにお別れのあいさつをしに来たとき、私はどんなにハナエのことが好きか言えなかった。ハナエへの手紙、いい考えね。

「では、わすれないように。みんな、自分が見たものを書いて、つぎの授業に持ってきてなさい」

「なにを書いてもいいの、先生？」 男の子が聞いた。

「見たこと、思ったことのなんでもいい。最初の一步だよ」

～～～

私はじっと見ながら歩いて行く。草、木、鉄道。草のかたち、葉っぱをゆらす風、小さな石。

うちでは、ノートに書いていく。カマドリが家をつくった赤い土のこと、野菜畑の黒い土、裏庭の灰色っぽい茶色の土、母さんが植えている苗木、私が見つけたかたつむり。

~~~~~

いつかユキオ兄さんと私で、かたつむり競争をしたことがある。でも私のかたつむりと兄さんのかたつむりは反対のほうへ行ってしまった。失敗。もう一度、かたつむりをつかまえた。はじめからやりなおし。すると、私のかたつむりはからのなかに頭をひっこめて、出てこなくなった。兄さんは、自分の勝ちだと言った。失敗よ、と私は言ったけど、兄さんは私の言うことは聞かず、となりへ遊びに行ってしまった。

私はそのことも書いた。そして、ほかにもたくさんのことを書いた。フダンソウは明るい緑色、ポロねぎは頭が白くて、だんだん暗い緑色になる、ハヤトウリはうすい緑色。私はごはんにはフダンソウのつけものが好き。ピーマンはきらい。なすはフライにすればいいけど、煮物はきらい。でもいちばん好きなのは、グアバでつくったお菓子和ガラナジュース。クズウコンのビスケットも食べたいな。

さくらのことは？さくらのことは、まだ書かないことにした。もうすこし、貝がらのなかにしまっておくことにした。

夜、部屋の窓から星が出ている空を見ながら、ハナエに手紙を書くことができないことに気づいた。戦争が終わらないうちは。私たちがこっそり勉強していることがわかってしまうから。私はもう一度、サン・ペドロ農場の学校のことを考えた。もしポルトガル語を書くことができれば、ハナエに手紙が書ける。ハナエは読めないかもしれないけれど、私がハナエのことを大好きだとわかってくれる。

## 開かない貝がら

ぶらんこをこいで、私は宙に浮く。前へ、うしろへ。グアバの木がぎいぎい音を立てる。体重がふえたのかな？前は鳴らなかった。私はこぐのをやめた。木の幹には、ユキオ兄さんとエミコ姉さんと私がつけたしるしがある。私は立って比べてみる。しるしは手のひらひとつ分くらい下のほうにある。



私たちが本をうめた日から、3年がたった。おとなたちがいろいろとちがうことを言っているのが聞こえてきた。戦争は終わった、とだれかが言った。おそらくまだだ、ほかの人たちはうたがっていた。

もちろん私はそれがほんとうで、ほんとうに戦争が終わってしまっていたらいいのと思った。でもだれもちゃんとわかっていなかった。地球の反対側のこと。どうやって確かめればいいの？

「せめて新聞が読めたら」母さんが言った。

父さんはポルトガル語の新聞なら町にあると言った。でも父さんは読めない。読めるなら、戦争がほんとうに終わったかどうかわかるのに。

私はサン・ペドロ農場の学校のことをずっと考えていた。たとえ遠くても、たとえ先生が言っていることがわからなくても、たとえほかの子供たちが私たちとは様子がちがっていても、あそこで勉強してもかまわないのに。でも、その前に、戦争が終わったかどうか、はっきりと確かめる必要があった。

父さんの知り合いのおじさんがラジオで聞いたとはっきり言っていた。それは天皇陛下の声だったって。どうやら日本は戦争に負けたらしかった。きっとまちがいだ、神さまたちがそんなことさせるはずがない、ほとんどの人たちは信じていなかった。確かにわかっているかと言えば、だれにもわかっていなかった。そしていつものいそがしさのなかで、時間はすぎていった。私にはあいかわらずなんにもわからなかったし、父さんは本をほりおこそう

としなかった。

お正月がやってきた。神さまやご先祖さまにおもちをそなえる。私は願いごとをした。農場の学校で勉強できますように、本がもどってきますように。

~~~~~

戦争は終わった、という声がだんだん大きくなっていった。日本はめちゃめちゃになっているかもしれないと言っていた。それに言いかえす人がいつもいて、日本は戦争に勝ったんだ、そして、自分はもうすぐふるさとへ帰るんだと言っていた。

でも私たちは相変わらずランプの明かりで、同じように授業を続けた。ただ、おとなりの古い物置小屋が勉強場所になった。それはつまり、見つけれられる心配があまりなくなったということだ。もう場所を変えて勉強をする必要はない。それに私たちの先生はいい先生。いろんなことを知っていて、いろんなことを教えてくれる…みんなは先生がうれしそうだと言っている。ずっと教えるのが好きだったからって。ある日、先生は私の作文をととてもほめてくれた。私はいちばん好きなお手伝いについて作文に書いた。それは、卵をひろって、おふろの火をつけること。あまり好きではないお手伝いのことも書いた。それは、おなべを洗うこと。

男の子が戦争は終わったのかと聞くと、先生はそのとおりだと答えた。でも、最後にどうなったのかは、はっきりとわかっていない。学校をまた開いてもよいという許しもまだ出ていない。今のところはね。それから先生は、戦争が終わってどうなったのか、たとえ、お父さんやお母さんとでも、話をしないように、と言った。どうして？そのほうがいいんだよ。とてもむずかしい問題だから、と先生は言った。もうすこし待とう、ただ待っていればいいんだ。すべてが変わってしまうから、おとなしくしていればいいんだ、と言った。

私はそれを信じなかった。戦争は終わっていないことが、もうすぐわかる。

それはただのうわさだって。そうでなければ、なぜ私たちがかくれて勉強をしなくてはいけないのかわからない。どうして許しがいるの？許しをもらうのに、こんなに時間がかかるの？どうして、父さんは本を掘り出してくれないの？

～～～

時の流れはいろいろなものにあらわれる…割れて、なかからヒヨコが出てくる卵に、柿の実の赤い色に、ときどきまわりを真っ白にする霜といっしょにやってくる寒さに。ほんとうに寒い時期には、父さんたちはカイコを育てる仕事ができない。すっごく寒い日には、焼いたピーナッツやおいもを食べながら、だんろにくつついているのが一番。

じゃあ、お休み？ぜんぜん。この時期には、桑の枝を切って、新しい枝が生まれるように、そして、つぎのカイコたちが青々として、やわらかい葉っぱが食べられるようにする。父さんたちはカイコ小屋の手入れもする。雑草を取って、カイコがまゆを作れるよう茂みを作る。

私がするお手伝いは増えてしまって、どこからはじめていいのかもわからない。こんなに寒い季節でいちばんいやなのは、お洗たく。水がつめたくて、手はこごえてしまう。

寒い季節は終わり、また日に日にあたたかくなっていった。

日曜日。近所の人たちが父さん、母さんと話をしにやって来た。手紙を見せているのが見えた。封筒の色で、地球の反対側から届いた手紙だとわかった。手紙が来なくなって、長い時間がたっていた。おとなたちは、居間でずっと話をしていた。

戦争が終わったという話は、ほんとうなんだ。手紙を見たとき、私はそう思った。終わったのね。私はとびはねたり、歌い出したりしたくなった。おとなはそうしたくないの？うれしくないの？

近所の人たちが帰っても、父さんは下を向いて、いすにすわったままだっ

た。なぜだかわからなかった。戦争は終わったんじゃないの？父さんがこんなに悲しそうにしているのを私は見たことがなかった。本をうめたときだって。どうして？晩ごはんのときも、父さんはずっとだまっていた。だれも話をしなかった。そして、みんながねた後も、起きていて、ひとりでお酒を飲んでた。

私は母さんに聞いた。

「戦争が終わったのに、どうして父さんはあんななの？」

「もう帰る場所がなくなったからよ」

「じゃあ、私たちの家は？ここは私たちの場所じゃないの？」

母さんは、そうね、土地があるから、ここが私たちの場所ねと言った。でも、父さんは家と土地のことだけで悲しんではない。もう帰る場所はない、と何度も何度も言っている。母さんはもうすこし話してくれた。

「ほんとうは、みんな戦争が終わっていたことをわかっていたのよ」

「どうして？」

「たぶん、あなたのお父さんは信じたくなかったのね。もっと信じたくなかったのは、日本が戦争に負けたっていうこと」

手紙が何通も届くのを見た。それは、みんなが死んでしまったわけではないということ。たぶん私たちの親せきは生きている。父さんはあんなに悲しがらなくてもいいのに、と私は言った。どんな国も戦争が終わったら、変わってしまうの、と母さんが言った。私たちが生まれて、大きくなって、あとにした国はもうないの。あなたはまだ子どもだから、わからない。

私たちはこれからもずっとここに住んで、ここが私たちがうめられるところ。父さんもそのことがわかっている。でももう何日か、お父さんをそのままにしてあげましょう。しばらくすると、父さんはまた土や、カイコや、作物のことを考えるようになるから。そう言って、母さんは大きなため息をついた。私は父さんがとてもかわいそうになった。

## 開いた貝

たなにはいろいろな置き物がならんでいる。私が集めた松ぼっくり、エミコ姉さんがとうもろこしの皮で作った花、父さんが仕事をひと休みしているときに彫って作った切り株の牛に、アルマジロに、亀。

～～～

午後の空にはほとんど雲がない。お昼の休けい時間が終わるころ、気持ちよい風が窓から入って来た。

「今日、本を掘りおこそう」急に思いついたように、父さんが言った。

私は思わず、キャッサバの煮物をのどにつまらせそうになった。みんなが父さんを見た。

「こんなに長い時間がたってしまつて。どうなっているかしら？」母さんが言った。

「少しかびが生えているかも。でも、お日さまにあてて、かわかせばいいのよ」エミコ姉さんはもう次にすることを考えている。

私は、煮物の最後のひと口をあわててかんだ。どうしてびくびくしているの？ やっと本がもどってくるのに。でも、それは貝がらを開いて、なかになにがあるか、わかってしまうとき。

母さんは、いそいで、もともと本がならんでいた居間のたなを、ふきんでふいた。置き物はぜんぶすみに寄せて、本をならべる場所を作った。

かべにかけられた写真のなかで、おじいちゃんたちが笑っていた。もうすこし上のほうの、神だなでは、神さまたちがきつと笑っているだろう。

「ユキオ、こっちに來て手伝ってくれ」父さんが言った。

私たちもアボガドの木の方へ行った。シャベルを手にして、ふたりは地面を掘りはじめた。掘り出されて、山を作っていく土を、私たちはじっと見つめていた。みみずのごちそうが食べられるかと思って、めんどりやひよこ

たちもやって来た。

やっと、土とおなじくらい真っ黒の木箱が出てきた。父さんはなかを見ようと箱をこじあけた。でもすぐに顔をしかめたから、私たちにもわかった。

たくさんの水がそこを流れたんだもの。本がどうしてそれを持ちこたえることができただろう？父さんはくちびるをかねで、頭をふりながら、箱をしめた。そしてまたその上から土をかけた。

~~~~~

さくら貝？ほんとうにあるの？それとも私の本のなかにしかないの？私はそんなことを考えていたから、部屋のドアが開いたのに気づかなかった。エミコ姉さんがいるのを見て、私はベッドから起きあがった。父さんたちを手伝って、小屋のそうじをしていると思っていた。それなのに私は手に本を持っている。姉さんは私のことをしかるかしら？それともせめてこの本がうちに残っていたのを知ってよろこぶかしら？

「なんだ、サユリもかくしてたのね？」

私はなんのことかわからず、姉さんを見た。

「私がしまっていたのを見せてあげる」

姉さんははさみをつかむと、カバーのぬい目を切って、なかのマットレスのぶあつい布のぬい目もほどいた。わらが飛び出してきそうな勢いでのぞいている。エミコ姉さんはわらのあいだに手を入れて、ひもでしばった新聞紙の箱を取り出した。くずがたくさんついてたのを、きれいにした。箱をあけると、黒くて厚いカバーの、古い辞書が出て来た。

「どう？こういうの、ほかにどこで手に入れられると思う？」

「父さんは知ってるの？」

「たぶんね。父さんがいつも使っているのを知ってたから、私がかくしたの。これからサユリの役にも立つわ。サユリは？何をかくしてたの？」

姉さんが何を言うか心配だったけれど、私は本を見せた。

「これ？私は見たことがない。母さんのだったの？」

「母さんがおばあちゃんからもらったって。私が読めるようになったら、くれる約束だったの」

「それで、もう読んだの？」

「何度も」

「よく勉強したのね」姉さんは、わらがはみ出そうとしている綿のぶ厚い布をもとどおりにぬいながら、言った。

「姉さんはほんもののさくら貝を見たことがある？」

「あるわ。ピンク色で、小さいの。さくらの花びらみたい」

本当にあるの？先生が教えてくれた小さな世界が。

何日かたって、みんな自分の貝がらを持っていたことがわかった。本が出て来たってこと？父さんたちの部屋から数冊あらわれて、ユキオ兄さんのところからも。まるでうちのなかで、本が芽を出したみたいだった。

【完】

おわりに

昨年度から前篇と後篇にわけて、本誌で発表してきた『サユリの本』の翻訳作業はここでいったん終了する。「いったん」と断り書きするのは、今後、訳を改良した上で、技術的な問題を解決し、作家自身が描いた挿絵とともに、あらためて世に送り出したいと考えているからである。日本でほとんど知られていない、ブラジルの日本移民の苦難の歴史の一端を、子供の素直な思い、夢や希望、不安をとおして伝えてくれるこの本を日本で紹介することには、少なからぬ意義があると信じている。

本作品は、まだ幼い子供の語りで物語が展開するため、それにふさわしい語彙の選択や、表現を心がけた。しかし、訳者にとって児童文学は未知の分

野であり、翻訳の経験不足と相まって、不自然な言い回しなど、改めるべきところが多々あることは想像に難くない。この試訳にどのくらいの方が目を留めてくださるか、いささか心もとないが、率直なご感想やご教示をいただければ幸甚の至りである。

最後に、本作品の日本語への翻訳と非営利目的を条件とした刊行を快く承諾してくれた作者のルシア・ヒラツカ氏にあらためて心より謝意を表したい。